

燃えろ

●計画はこう立てろ、参考書はこう選べ、英語はこうやれ、数学はこうやれ、等々ということはいくら細かく知っていても、それは要するにレールを敷いたというだけのことであり、またレールの上に汽車をのせたというに過ぎない。どんな非のうちどころがないレールや汽車ができあがっても、それだけでは汽車は一メートルはおろか、一センチも動かない。

●それを動かすには石炭に火をつけることが必要である。いったん石炭に火がつき燃えあがれば、やがて汽車はうなりを立てて走り出す。今までレールや汽車それ自体のために費やしていた努力が、この時、この石炭が燃え上がる時、それによってことごとく生きてくるのである。

●もちろん石炭が燃えなくとも、他からの力で押すか引くかすれば、少しは動くかもしれない。しかし、それがいかに困難であり、苦しいものか僕は知っている。そして驚くべき力の消耗を伴うものであることも知っている。

●ところで実際に受験生に接し感じることは、まったく燃えないのか、またはほんの少ししか燃えない汽車を、無理に、あるいは他の力に押されたり引かれたりしながら、時にはいやいやながら動かしている者が大

半であるということだ。

●それも仕方ないことのように思われる。なぜなら十七、十八歳で人生の意義をつかむのには時代が、環境が悪すぎるからであり、人間が人間らしく生きることを失いつつある日本であるから。そろばんづくの功名心や虚栄心、競争心などで燃える火が、もともと貧弱な火でしかないことは、きみたち自身が、誰よりもよく知っている。きみらは、いかに頑張ろうとしてみても、心の底から力が湧き出てこないのに、実はイライラし、ジリジリして悩んでいる。やらなければならぬとは十分にも十二分にも知っていないながら、やれないのだ。

●それは、君らの中の魂の中に赤々と燃える火がないからである。質の悪い石炭の力で動こうとするからである。では魂のなかに本当の火をつけるためにはどうすればよいか。

●これは難しい。生きて、苦しみがあがいて身につけるかもしれない。あるいは、若い君たちなら、希望に全身を投げ込む覚悟から生まれ変わるかもしれない。

●今日は、参考までに僕の人生観を書いておきます。

●「人生は、他人に自分の優秀さを見せびらかすためにあるのではない。他人に勝つ喜びを味わうためにあるのではない。前途に立ちほだかる様々な困難を乗り越え、きりひらき、そうすることによって自己を無限に高め、天地の化育に参し、新しい時代がそこまで来ていると信じ、模索し、限り



なき挑戦をすることこそ本当の人生の意義がある。人生は絶えざる自己との戦いである。その戦いを、戦い取ろうと決意するとき、魂の火が本当に燃えるのである。燃えないところに真の生活はなく、真の勝利はない。全ての勝利は、他人に勝つことではなく、自分に勝つところに存在する。二度と来ない一生だ、全身全霊でやるぞと燃え立たなければ……。」(柳)

異例の高校入試?

●例年なら、この創学舎ニュースが手元に届くころには、学校の夏休みまであと数日となり、カウントダウンで気分も盛り上がっているときだろう。それが、夏休みが短縮され、総体も中止になるとは、誰が思っただろうか。そもそも今年は東京オリンピックが開催されると誰もが疑わなかったのが、今年の年明けだ。あの頃が懐かしくもある。しかし、現状は受け入れなければならぬ。特に今年の中学三年生は異例の受験競争が始まるかもしれない。ただでさえ、千葉県の公立高校入試が一本化される大きな変革の年なのだが、更なる変更も可能性が出てきた。

●文部科学省が五月十三日に各都道府県に令和三年度高等学校入学者選抜について配慮をお願いする通知を出している。内容を抜粋すると次のようになる。

① スポーツ・文化関係の行事や大会の実績、資格・検定試験の成績を評価する際には、中止や延期で入学者志願者が参加できなかったことのみをもって不利益を被ることがないよう、措置を講じること。

② 出席日数や学習評価の内容等の記載に より、特定の入学者志願者が不利益を被ることがないようにすること。

③ 出題範囲や内容、出題方法について、必要に応じた適切な工夫を講じていただきたいこと。

④ 各中学校等においては、進路指導をより丁寧に行い、志願先の高等学校等に関わる入学者選抜の内容をしっかりと入学者志願者に伝え、不安払拭に務めること。

⑤ 小学校や中学校等の入学選抜についても、上記の①から④までに準じた工夫を講じていただくことが望ましいこと。

●おそらく受験生が、特に気になる項目は③の出題範囲だろう。

●千葉県は七月六日現在、出題範囲については公表されていない。(七月十四日に公表) 近都県は以下の対応になっている。

●東京都は早々に入学者選抜において配慮することを発表し、六月十一日出題範囲の縮小を具体的に公表している。中学三年生の学習内容のうち、おおむね七ヶ月程度で学習可能な範囲から出題する。国語では三年生の教科書で学習する漢字、数学では三平方の定理などが範囲から除外され、五教科すべてで出題範囲を縮小している。

●茨城県は六月一日に出題範囲の変更はないことを公表している。

●埼玉県は六月三十日に学習状況を踏まえ、出題範囲を縮小する方向で検討する、



と公表している。

●全国で見ても各都道府県で対応は様々だが、地域の休校期間にも関係しているのだから、受験生や保護者の方にとっては気もそぞろではないだろうか。そういう意味では千葉県から早く公表されることを願うばかりである。受験情報は公表され次第、提供していく。

●ただ、受験生が今やることは変わらない。目の前の課題、創学舎の宿題や副教材、やるべきものは大量にある。それを一つ一つ丁寧に進めていくことだ。(佐々木)

類推能力を磨け

●「すべての国民は、法の下に*等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、*済的又は社会的関係において差*されない」という文章があつたとき、*の部分には、平等、経済的、差別という言葉が入ることは想像に難くないところでしょう。ところが現実には、程度の差こそあれ、この想像、類推ができない生徒が数多く存在します。そして、この類推能力の欠如が、学年が上がるにつれて大きな差となつて現れてきてしまうのです。

●初めに挙げた文章を板書し、*の部分のみがよく見えなかったとき、そこは何と書いてあるのですかという質問を發する生徒が必ず存在します。小学校の低学年ならば無理からぬことですが、少なくとも中学生以上ではかなり問題です。この質問をした生徒がノートをとるときの記事の読み方は、

す・べ・て・の・国・民・は……なのです。

こう書くと、私はそんなひどい読み方していないとその生徒は反論するでしょう。しかし、それは初めに述べた通り、程度の差の問題であり、本質は同じなのです。初めて文字を習つた子供は、す・べ・て・の・の・一文字一文字正確に書くことから訓練を始めます。当然、読むときも一文字一文字しかできません。しかし、次の段階では、すべての・国民は……と文節ごとに読み始め、そして、さらに大きなまとまりごとに読めるようになっていくという発達段階を経るのが通常です。しかしながら、先に挙げた生徒は、この通常の訓練が不十分であつたために、まとまりごとに文章を理解することができないわけです。したがって、一箇所でもわからない(読みとれない)と、全体の意味もとれなくなつてしまうのです。これが、私の言う類推能力の欠如です。

●例えば、中学生が英語の教科書暗唱テストで文章を覚えきれない原因の一つも、この訓練の不足です。また、高校生が、英語の文章でわからない単語があると、その文章全体の意味がとれなくなるのも類推能力の欠如が原因です。単語数一万の受験生が、五千の受験生に英文解釈において敗れるのも類推能力の欠如のなせるわざであります。

●この類推能力を身につける第一歩は、速読速解の訓練です。あくまでも速読速解であり、理解を伴わない速読は全く無意味です。小学校の高学年の頃からは、常にこのことを念頭において文章を音読すべきです。この積み重ねこそが類推能力を磨く礎なの

ですから。(村上)

「集団知」②

●「集団知」(知っている、知らないに関わらず集団として受け入れた価値観・判断)の続きである。人の行動の多くはまず思いつきから始まることを前提で述べたが、教育に関する様々な変更も同様である。具体例として、大学入試をとりあげてみよう。

現在の高三生は、四技能検定でかき乱され、センター試験から共通テストへの変更で苦しめられている。戦後最もかわいそうな受験生たちといえるかもしれない。

●まず、共通テストのことから考察しよう。国語や数学で記述式を導入する方針が発表され、大きな騒ぎとなつた。採点の民間委託、採点者の確保の困難、採点の公平性の問題点などが噴出して、その方針は変更せざるを得なくなつたが、お忘れになつた方も多いだろう。変更となつたのは大学の教員、高校の教員をはじめ、判断力のある識者、そして高校生たちの声が大きき力となつたからであつて、もし彼らが沈黙していたら、そのまま実施されて大

混乱となつていたはずだ。
●では、なぜ記述式を導入する方針が出されるのか?現場を知る人ならかなりの人が反対するであろう方針がなぜ決定されるのか?実はこれも「力のある人」の発言である。(出典は資料の中に埋もれて明示できないことをお詫びします)こういう発言の内容に私は実はある程度同意



はしている。以下項目別に検討していこう。

●「今の若者は表現力や思考力が弱い」というのは正しいと思う。問題は入試問題を変えることによってそれを打破しようとする思いつきの短絡さである。そもそも、年齢が六十才過ぎの人たちまでは全て共通一次世代、センター試験世代である。試験の形式が問題であれば今の官僚、六十才くらいまでの政治家、企業の経営者、役員など全て表現力と思考力が弱いということになる。これは誰が考えてもおかしな論理構成であろう。実は、若者の表現力、思考力の低下の原因は他にある。大学受験生の数がピークの半分近くに減つたことで名門といわれる大学生のレベルも当然下がつたこと。大学の数が増え続けて、昔であれば大学には進めなかつたはずの成績の人たちが進学するようになったこと。様々な娯楽や器具が増えて本を読まなくなつたこと。こうした事実を検討していくことから始めなければ改善はおぼつかない。因みに「思考力・表現力」を含めた学力の低下は甚だしく、主観だが親の世代で偏差値六〇だった人がタイムスリップして今の時代に來たら偏差値七〇ぐらいになるのではないかと思う。

また数学のチャート式シリーズは、かなりの人が手にしたことがあるかもしれない有名な本だが、現在は難しい順に赤↓青↓黄↓白の四種類となつており、そのレベルは昔の青チャートが今の赤チャートという程度に易化している。(以下次号)

(小林)